

光源氏、本命の空蟬に逃げられ間違つて隣に寝ていた軒端萩と関係し契る（源氏物語・空蟬）

一度は空蟬うつせみと関係した源氏は、その後空蟬から返事ももらえないのを恨めしく思っていた。二度目の機会を待ち続け、男達が不在な時期を見計らつて、空蟬の弟に手引きをさせひそかに空蟬の家に入ってきた。空蟬とその義理の若い妹の軒端萩が囲碁をしていると聞き、源氏は垣間見ようと家の中で忍んでいる。

さて向かひみたらむを見ばやと思ひて、やをら歩み出でて簾のはさまに入り給ひぬ。この入りつる格子はまだ鎖さねば、隙見ゆるに、寄りて西さまに見通し給へば、この際に立てたる屏風端の方おし畳まれたるに、紛るべき几帳なども、暑ければにや、うち掛けて、いとよく見入れらる。

火近う灯したり。母屋の中柱に側める人やわが心かくると、まつ目とどめ給へば、濃き綾の単衣襲なめり。何にかあらむ表に着て、頭つき細やかに小さき人の、ものげなき姿ぞしたる。顔などは、差し向かひたらむ人などにも、わざと見ゆまじうもてなしたり。手つき痩せ瘦せにて、いたうひき隠しためり。

<sup>3</sup> いま一人は、東向きにて残るところなく見ゆ。白き羅の単衣襲、二藍の小桂だつもの、ないがしろに着なして、紅の腰ひき結へる際まで胸あらはに、ぼうぞくなるもてなしなり。いと白うをかしげに、つづつと肥えて、そぞろかなる人の、頭つき額つきものあぎやかに、まみ口つき、いと愛敬づき、はなやかなる容貌なり。髪はいとふさやかにて、長くはあらねど、下り端、肩のほどきよげに、すべていとねぢけたるところなく、をかしげなる人と見えたり。

1 傍線は読解に役立つ重要語。数字は読解で意識するポイント。  
2 「目をとどめた」相手は誰？「心かくる」は連体形なので「かくる人」疑問や」となる

3 空蟬と軒端萩の対比はどう描かれているか。登場人物の敬語の使われ方を把握し続く段落の読解に備えよ。

4 空蟬とは対照的に描かれているは高評価？ 小さい空蟬に対して背も高い。「愛ぎやう」「はなやか」など全体に好印象に描かれている。

中略。源氏は、人々が寝静まるのを待ち、几帳を引き上げて寝室に侵入した。

碁打ちつる君、「今宵はこなたに」と、今めかしくうち語らひて寝にけり。若き人は、何心なくいとようまじろみたるべし。かかるとはひの、いと香ばしくうち匂ふに、顔をもたげたるに、単衣うち掛けたる几帳の隙間に、暗けれど、うち身じろき寄るけはひ、いととしるし。<sup>7</sup> あさましくおぼえて、ともかくも思ひ分かれず、やをら起き出でて、生絹なる単衣を一つ着てすべり出でにけり。

君は入り給ひて、ただひとり臥したるを心やすく思す。床の下に二人ばかりぞ臥したる。衣を押しやりて寄り給へるに、ありしけはひよりは、ものものしくおぼゆれど、思ほしうも寄らずかし。いぎたなきさまなどぞ、あやしく変はりて、やうやう見あらはし給ひて、あさましく心やましけれど、<sup>10</sup>「人違へとたどりて見えむも、をこがましくあやしと思ふべし、本意の人を尋ね寄らむも、かばかり逃るる心あめれば、かひなう、をこにこそ思はめ」と思す。かのをかしかりつる灯影ならば、いかかはせむに思しなるも、悪ろき御心浅きなめりかし。

<sup>12</sup> やうやう目覚めて、いとおぼえずあさましきに、あきれたる気色にて、何の心深くいとほしき用意もなし。世の中をまだ思ひ知らぬほどよりは、さればみたる方にて、あえかにも思ひまどはず。我とも知らせじと思ほせど、いかにしてかかかることぞと、後

5 リード文や登場人物から推測して、誰と誰がどうして、どういう状況か。貴族の男性が着るものに香をたきしめていたことから考えよ。

6 この部分の行動の主体は？

7 誰があさましと思つたのか。

8 「ありし」とは

9 「やうやう見あらわし」たとはどういうことか。

10 この独白で言おうとしていることは何か。

11 かの火影とは何かといえ、先ほど覗いた碁の情景だろう

12 軒端萩はどのように描かれているか。

に思ひめぐらさむも、わがためには事にもあらねど、  
あのつらき人の、あながちに名をつつむも、さすが  
にいとほしければ、たびたびの御方違へにことつけ  
給ひしさまを、<sup>13</sup>いとよう言ひなし給ふ。たどらむ人  
は心得つべけれど、<sup>14</sup>まだいと若き心地に、さこそさ  
し過ぎたるやうなれど、えしも思ひ分かず。

憎しとはなけれど、御心とまるべきゆゑもなき心地  
して、なほかのうれたき人の心をいみじく思す。「い  
づくにはひ紛れて、かたくなしと思ひるたらむ。か  
く執念き人はありがたきものを」と思すしも、あや  
にくに、紛れがたう思ひ出でられ給ふ。<sup>15</sup>この人の、な  
ま心なく、若やかなるけはひもあはれなれば、<sup>16</sup>さす  
がに情け情けしく契りおかせ給ふ。

<sup>17</sup>「人知りたることよりも、かやうなるは、あはれも  
添ふこととなむ、昔人も言ひける。あひ思ひ給へよ。  
つつむことなきにしもあらねば、身ながら心にもえ  
まかすまじくなむありける。また、さるべき人びと  
も許されじかすと、かねて胸いたくなむ。忘れて待  
ち給へよ」など、なほなほしく語らひ給ふ。<sup>18</sup>「人の思  
ひはべらむことの恥づかしきになむ、え聞こえさす  
まじき」とうらもなく言ふ。「なべて、人に知らせば  
こそあらめ、この小さき上人に伝へて聞こえむ。気  
色なくもてなし給へ」など言ひおきて、かの脱ぎす  
べしたると見ゆる薄衣を取りて出で給ひぬ。

13 源氏は何を「いいなし」ているのか。

14 軒端萩は若いからどうだというのか。

15 源氏の空蟬と軒端萩に対する感じ方は

16 結局源氏は軒端萩をどうしたのか。

17 この発言の内容と意図を考えよ。

18 この発言からわかる人柄を考えよ。